

皆様、あらためましてこんばんは。恵飛須圭二と申します。今日は皆様方には本来であれば私が教えていただかなければいけないことばかりだと思っておりましたが、こういう機会をいただきまして、非常に光栄に感じております。私は広島県出身の32歳でございます。現在は松下政経塾の3年目の在塾生として研修活動を積んでおります。

今日は「志と挑戦」、そしてサブタイトルに「生き方考え方と志の同一化」という非常に大それたタイトルをつけてしまったのですけれども、私自身が今何を考えて政経塾で研修をしているのかをお話させていただければと思いました。皆様少しおつきあいただきたく、お願いいたします。

それでは最初に、自己紹介を簡単にさせていただきます。前職、松下電器産業に5年間お世話になりましたけれども、それを退職して入塾しております。私自身がどういう思いで過ごしているかをお話させていただきます。そしてロータリーリーダーの皆様を前にして恐縮ですが、私自身が考えるリーダーシップとはということを今日現在の時点で考えていることがございますので、それをお伝えさせていただきます。

私は広島県の東広島市というところに生まれました。父と母で小さな町工場を経営しており、その一人息子でおばあちゃんっ子として育ったという経緯がございます。そして二十歳の時まで地元の小学校、中学校、高校に通いました。大学時代には慶應義塾大学の総合政策学部、先程紹介してくれた黒岩公輔君と同じ学部に進学いたしました。その間に少林寺拳法を中学校の頃から現在まで18年やっておりますが、それを慶應義塾大学では体育会としてさせていただいたという経緯がございます。

そして2008年にパナソニックに採用され、人事担当として配属されました。後ほどお話をさせていただきますが、私自身が今の道に進んだのはこのパナソニックの経験が非常に大きく人生に影響しております。そしてその後3年前から松下政経塾で、テーマは特に持続可能な自力のある地域の創造、人口減少した社会の中で地方、私の住む広島も非常に元気がなくなってきております。若い人もなかなか帰りたいけど帰れないという仲間も沢山おります。そういった地域の活性化、何が必要なのかを探求してまいりました。

私の志をお話させていただきます。私は前職のパナソニックでは人事で配属を受けました。2008年といえば皆様ご記憶に新しいかと思いますが、リーマンショックが起こった年です。そして新聞誌面を賑わしたパナソニックの巨額な赤字というのも記憶に新しいかと思いますが。

私は当時、半導体事業部の担当人事に配属を受けました。半導体といえば一時は「産業の米」とまで言われた産業ですが、2000年代から世界各国の国々に技術で追いつかれ、価格競争で崩れていくといった産業でした。私がやっていた仕事というのは構造改革でございます。まさに国内の地方工場の整理とか、人員の最適化。言葉ではきれいですが、非常に大変な仕事でした。

私は京都に赴任しましたが、この構造改革担当としては北陸の富山県に赴任いたしました。約2年かけて地方工場を縮小していくという方針のもとに、日々人事担当として従業員と会社の間に入って仕事をするという仕事をさせていただきました。皆さん想像していただけたと思いますが、地方の工場というのは高度経済成長期には1,000人から1,500人、大きなところでは3,000人規模の従業員がその地域の中から雇用が生まれております。それが失われるということはどういうことなのか、私自身頭ではわかっているつもりだったのです。ですが人ひとりの雇用が失われるということ、それは言うまでもありませんが、工場がなくなってしまうということは地域が崩壊していくと言いますか、秩序の崩壊というものがございます。

同じ小学校に子供を通わせて、同じスーパーに買い物に行って、そして3軒隣の人が来月までよ、

というような話が自分の耳にも入ってくるような状況でございました。そうしたときに私自身はこの残された地域というのは誰が再生していくのだろうと。事業としては撤退するけれども、残された住民、行政、政治、様々な方々がいますけれども、本当に自力をなくしている地域、それを誰が支えていくのかということに非常に大きな疑問を持ちました。

そして私自身がそのときに自分の父親くらいの(年齢の)方々を次のステップに会社から出て行っていただくということもございましたので、そのときに非常に悩みました。私自身がこういう仕事をしていて、自分はそんな資格があるのかと悩みました。そして自分自身が人生を賭けて、今後どのみち生きていくのであれば、何を大事にして生きていきたいのかということを考えるきっかけにもなりました。地元・広島で働きたい、そこで骨を埋めたいという気持ちを非常に強く抱きました。富山県だけでなく、そのときには日本全国の地方は同じような状況が起きておりました。私の地元にも工場、有名なところで言えばエルピーダさんやシャープの工場もございます。そういう工場がございましたので、地元でやりたいと。そしてそれが何故、政治的な立場で？政治的な立場とはどういう立場でやるかということ、やっぱり住民の皆様自身が最終的には立ち上がらなければいけないのですが、それを大きく制度的に支援できるのは政治しかない私は強く感じました。そして一企業人として無力感と共に使命感というものが芽生えました。そこで私は会社を退職して、一から勉強するという事で松下政経塾に入塾を決意したということでございます。

私は生まれ育った町に恩返しをしたいという思いです。そして広島で持続可能な自力のある地域を作りたいというのが私の志になります。東広島市を訪れられたことがあるかどうかわかりませんが、広島県の中心部、へそという部分になります。酒蔵の町として有名なお酒が沢山ございます。「賀茂鶴」「賀茂泉」というのはお聞きになったことがあるかもしれません。そして南には広島の特産品、名産地の牡蠣がございます。こうした海、山、川がそろった自然豊かな町でございます。

地方を概観しますと今自治体自体が財政的に厳しいと。そして公共施設自体も老朽化が進んでいて建て直しをしなければいけないけれども、そのお金もない。どうやって生み出すのかというような様々な問題がございます。こうした市民のニーズや価値観の多様化というものが進んでいる中で、私自身はこれからは「政治」、「民間企業」、「行政」と分けるのではなくそれぞれのアクターが垣根を越えて課題に取り組んでいくという仕組みが必要だと感じております。

そして私自身が政経塾のひとつの研究テーマとしていたのが自治体に経営感覚をもたらすという考え方でございます。優先順位をきちんと決めて、長期的なビジョンを持って執り行うということ。そしてそこに住む方々の力をいかに発揮させるかということと、地方に最も欠けていると思われる多様性でございます。こういう慣用性というものをどうやって田舎の地域が受け入れていくのかといったところに強い問題意識を感じております。

その中で民間主導の公民連携の推進による街づくりを研究テーマとしてやってまいりました。今までは行政が何もかもやっていた。特に田舎の地域ではそういうことが見られましたけれども、今後は民間企業のノウハウ、知恵をどんどん街づくりに入れていくということが非常に大事だと。それと同時にビジョンと経営の考え方をいれていくということを研究しておりました。この方針については皆さんご存知の通りだと思いますが、PPP(Public-Private Partnership:官と民がパートナーを組んで事業を行なうという新しい官民協力の形態)、PFI(Private Finance Initiative:民間が事業主体としてその資金やノウハウを活用して、公共事業を行なう方式)というようなカタチで政府の日本最高戦略のほうにも打ち出されておりますし、昨年末の新聞では事業費が10億円以上超えるものについては優先的にPPP、PFI方式を使っていこうという大きな方針が出されております。

この政策が出されている時点で、地方の自治体はその地域だけでやっていくのは非常に厳しいという現実があると思っております。こういう研究をしておりました。しかし一方で本を読んでわかることに

は限界がありました。というのもPPP、PFI、いわゆる公民連携で事業をやったときに何が問題なのかどうしても見えてこない。持続的に事業が続かない理由が何かというのは数字を見なければわからないというところがございます。そういった意味で私は広島県に於いて公民連携で事業を手がける会社へのインターンをしておりました。元々はマンション管理の会社ですが、一方のストックビジネスを基軸にPPP、PFIに参入している会社でございます。

中身の詳細は少し割愛させていただきますが、私自身が民間と公的機関がどういった連携が必要なのかといったときに、まず公的機関が権限を持ち過ぎてしまうということが決定的でございます。一緒にやろうよと掛け声はしますが、民間企業がどれだけ裁量があるのか、どういうところまできているのかというと、まだまだいろいろな規制の中で縛られながら民間企業もやらざるを得ない状況にあるということです。これには公民の役割の明確化というところが書面のみでしか落とし込まれないという難しさがありまして、書面に書かれていることは出来ない。オーバーラップしてやることは出来ない。じゃあやるのであれば費用負担はどこがするのだ。これは個人個人の話にもみられることかと思いますが、こういうことが組織と組織の間でも起こっている。このバランスというものをどうとっていくのかというところにひとつ私は政治の役割があるのではないかと考えております。

そして私自身の考え方は、先ほど申し上げましたが、これからの問題というのは様々なアクターの垣根というものを超えて解決していかなければいけない中で、それがお互いに足を引っ張り合うようなかたちになれば、それぞれが持っている力が発揮できない状態になります。今の政治を見ているようです。こういう状況が民間企業にも出来るだけ起こらないように、政治としてはどう交通整理をしていくのかというところを考えたいと考えております。

私は政治を志しております。冒頭に述べた通りです。どんな政治家を目指しているかという点と相対し異なる利害にある人格、そして法人格も含めて秩序や調和をもたらす人材になりたいと考えております。この後、リーダーシップの話に少し触れさせていただきますが、リーダーはぐいぐい引っ張るだけがリーダーではないのが皆さんもご承知の通りだと思います。私はそれぞれのアクターの力を最大化する、そんなリーダーを目指しております。

今の政治を見ても求める姿として与野党のパワーバランスというのが著しく崩れた状態にあると思います。そしてそのことによって様々な政治不信の問題や積極的な社会参画というものが行なわれないような、こういった事態が見られていると思います。こういうことを、口を閉じて知らぬ顔をするのではなくて、まずこういう状態があるのだということをしっかり受け止めて、政治を前に進めていくためにはどうすべきかということ私自身は考えていきたいと思っております。

まず特に与党が一極化、強大化してしまうと、どうしてもそこに傲慢さや内部の権力闘争が生まれてきます。これは企業でも一緒だと思います。健全なバランスというものをとっていくことが日本の民主主義にとっては非常に大事なことだと考えております。

私の考えるリーダーシップについてです。皆さん、少し頭の中で考えていただきたいのですが、「リーダー」とはどういう存在を思い浮かべますかと言ったとき、例えば白紙の紙に「リーダー」というものを書いてくれと言われたときに、お名前を書かれる方もいらっしゃると思いますし、何か絵を想像される方もいらっしゃると思いますし、それぞれにあるものだと思っております。

私はこの問いを実は政経塾 2 年目のときに問いかけられたときに、しばらく何も浮かんできませんでした。少し経ってある絵が浮かんできました。自分でも奇妙だったのですが、こういう絵が浮かんできました。これは私の手書きですが、少し説明をします。手前にある黒い大きな影は、ある大きな存在の背中なわけですね。こっちを向いていない状態です。そして向こうには昔の日本の農村地帯を表すような風景が見えております。動物も犬や猫や家畜も含めて一緒にいるような世界です。そして私の中でこの絵が浮かんできたときに一つひとつ整理をしてみました。何故この絵が浮かんできたのかと。

この絵の中には各々が仕事、それぞれの役割に精を出して全うしている姿というものが私の中のイメージとしてあります。そして嘆きや悲愴感はないのです。あふれてはみ出ている人もいないのです。人々は仲がいいという表現はおかしいですが、それぞれが充実したかたちでいる。誰かが作ったものを誰かが買っているとか。人間も動物も一緒に生活している。決して高度ではないけれども豊かな生活、豊かな姿に私は見えました。

そのときに考えたときはその影は何だろう。存在認識はされているけれども意識されていない空気のような存在である。見られていることを心の中で意識はそれぞれがせずとも持っていて、ただ黒い影のリーダーというのは何を指示を出すこともないというような。私も初めてでしたので、どういう存在なのかと自分の中で非常に解釈に苦しんだのですが、このように整理を自分ではしています。

リーダーとは存在そのものであると思います。もっと言えば空気のような存在かもしれません。そしてその人の心の中に宿る存在であります。そして直感的に認識されるものだと考えております。常に空間を包み込んで調和や秩序をもたらすような、そういった人材というのがリーダー。これが私のリーダー像です。これに対して様々な意見があるかと思いますが、私自身はそのように考えております。

最後になりますが、志を持って地元で生きるというストレートな思いが私の人生を賭けた思いでございます。一人ひとりが持って生まれた使命というものがあると思います。そういった能力が最大限に生かされた地域、そして社会作りというものを目指していきたいというのが私の活動理念でございます。以上で私の発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

<閉会点鐘・総評：黒岩会長>

恵飛須先生、ありがとうございました。私も今日の卓話でRCのリーダーシップ論を学んだような気がしました。もう3月でございますので、私も春風のような存在になってやっていきたいと心から思った次第です。残り4カ月でございますので、そういう気持ちでやっていきたいと思っております。

アメリカでは大統領が沢山出ておりますが、大統領の半分はロータリアンなのですね。大統領になってロータリアンになったのではありません。RCの会員として奉仕の理想を養いながら大統領にまでなったのであります。その中で最も有名な方がジョン・F・ケネディですが、他にも沢山いらっしゃるのです。恵飛須先生の理想を現実のものに成るようお祈りするとともに、今後のご活躍を祈念いたします。

我々は、お金のある方はお金を、知恵のある方は知恵を、何も無い方は汗を出して応援をしていただきたいと思っております。今日は本当にありがとうございました。第44回目の例会を終了します。